

スルヤ・クマール・ボース氏の講演（25-11-6 憲政記念会館）

本日、大東亜会議 70 周年を祝うこの歴史的な場で、皆様にお会いできたことを光栄に存じます。お招きくださった主催者の方々には心より感謝申し上げるとともに、この美しく友好的な国にまた戻ってこれたこと、友人達と再び会えたことを嬉しく思います。

ちょうど数ヶ月前、私は来日していたのですが、その時にもどこへ行くにも温かい歓迎を受けて心から感動したものです。そしてそれはある意味、日本の方々は今でも抱いている私の大叔父ネタジ・スバス・チャンドラ・ボースへの愛情と敬意のためであるということもわかっております。

半世紀以上も前の 1953 年 12 月、時の外務大臣重光葵は私の父に手紙を書きました。そこではネタジ・スバス・チャンドラ・ボースを「アジアの英雄」とたたえています。重光は次のように書いています。

「アジアの英雄ネタジ・スバス・チャンドラ・ボースの名前を聞いて私は大変喜んでいました。彼はかつての私の親友であり、そのことを私は誇りに思っていたのです」

チャンドラ・ボースは日本でも知られているように、自由インド仮政府の元首でありインド国民軍の司令官でしたが、1943 年 11 月 5 日、6 日に行われた大東亜会議に「オブザーバー」として招かれたのでした。

この歴史的集会を振り返って、ビルマのバー・モウ博士（当時ビルマ国首相）はチャンドラ・ボースについて次のように語っています。

【以下、 バー・モウ博士の言葉】

ボース(ネタジ)はこの大東亜会議に参加し、シナ、満州国、タイ、フィリピン、ビルマの指導者たちと会った。彼はみんなから温かく迎えられた。

彼は制服を着ていかにも威厳のある軍人らしく、彼の祖国が抱える偉大さと悲劇、自由を求める長い戦いの痕跡をまとっていた。

彼は単にオブザーバーとして参加していたのだが、それは、自由インドはまだ領土を持っていなかったからだ。しかし東条首相はすぐに自由インドにアンダマン諸島・ニコバル諸島を割譲して、この立場を変更してくれた。

東条首相はまた、会議の最後、大集会において私（バー・モウ）が演説をして、そこでボース(ネタジ)とインドの大義について言及してくれるように頼んできた。

東条首相は全世界に向けて、闘志に燃えた演説をするように頼んできたのだが、私も全力をつくすと答えた。実際、私は全力を尽くした。演説主題は、インドの独立なくしてアジアの独立なしということだった。

期待以上にこの演説はうまくいった。アジアの民がアジア自身の手で集まり開かれた会議において、すでに民族自立の機運は高まっていたのだが、この演説によってそれは決定的となった。

ボース(ネタジ)はとても感動的な言葉で私の演説に応じた。彼が話すに連れて、彼の声と目は潤んでいった。聞く者はみんなそれに魅了された。

歴史の流れの中で、権力者は次々に入れ替わる。しかし、年月とともに生き続け、育ち続ける言葉を語ることができる人間はごく僅かである。そうした人間こそが国民にとっての物語となるのだ。

スバス・チャンドラ・ボースこそが、まさしくそのような稀有な人間なのだ。

【以上、 バー・モウ博士の言葉】

1943年6月19日に来日した折、記者会見でチャンドラ・ボース自身は次のように述べました。

【以下、 チャンドラ・ボースの言葉】

インド人の日本に対する感情をお知りになりたいでしょう。日本は、他の大陸の国家がアジア大陸に侵略するのを食い止めた最初の国です。

過去2000年の間、インドと日本は文化的に密接な関係を保って来ました。イギリスがインドを支配したため、この絆は中断されてしまいました。しかしインドが自由を獲得すれば、この関係は再び強まるでしょう。

両国が完全な自由を享受し、それぞれの国家の命運を切り開くにあたって、インド人が日本と協力することは全く自然なことなのです。

この機会に申し上げておかねばならないのは、1942年3月に東条首相がインドに関して行った声明はインド人の心に深く染み渡り、自由独立運動に勇気を与

えてくれたということです。

【以上、 チャンドラ・ボースの言葉】

今日、私達がここに集まったのは70年前の歴史的会議を記念し祝うばかりではなく、未来に目を向けて、過去からどのような教訓を引き出し、

その教訓に基づいて「新世界秩序」を築くことができるかに思いを馳せるためでもあります。それこそが、かつてチャンドラ・ボースが言った意味なのです、「我々は光を求めて今一度アジアに立ち返らなければならない」と。

大東亜会議におけるチャンドラ・ボースの言葉を思い出してみましょう。

【以下、 チャンドラ・ボースの言葉】

議長（東条首相）閣下！ 私が昨日及び本日、この大東亜会議の議事を傾聴している際、私の眼前には「パノラマ」の如く、世界の歴史が去来してきました。

私は過去 100 余年もの間に開催された数多くの国際会議を回想しました。……………
そして、かつて私がインドの自由の叫びに耳を傾けてくれる者を求めて、幾日も虚しく彷徨したことのある国際連盟の会議、そしてその廊下やロビーを想起しました。

加えて、更にこの歴史的会議(大東亜会議)の議事を聞いていて、私はこの会議とかつて世界史上に現れた類似の諸会議との間に、大きな差があることを想います。

議長閣下！ 本会議は、戦勝者間で行われる戦利品の分割の会議ではありません。それは弱小国家の犠牲に供する、陰謀、謀略の会議でもなく、又弱小である隣国をだまそうとする会議でもないので。

本会議は、開放された諸国民の会議であり、正義、主催、国際関係における互恵主義及び相互援助等の原則に基づき、世界のこの地域に新秩序を創建しようとする会議です。

私はこのような原則に基づく会議がこの日出づる国(日本)にて開催されたことは偶然ではないと考える者です。

そもそも世界が光明と指導とを東洋に求めたということは、これをもってはじめてではないからです。

世界新秩序建設は過去において、かつ他の地域において、何度も試みられてきましたが、全て失敗に終わりました。それは新秩序創建の指導的立場に立つべき者に利己欲、強欲及び猜疑心があった為です。

それ故にここに世界が再び光明を東亜に仰がねばならないことになったのはまことに当然の理であり、歴史的必然なのです

【以上、チャンドラ・ボースの言葉】

ある逸話があります。東京到着後、ボースはたくさんの将軍たちや外務大臣重光葵と会いました。

東条首相は勿体ぶってボースと会うのを後回しにしようと考えたのですが、政財界に隠然たる力を有する玄洋社（黒龍会）の指導者頭山満翁が東条を急がせ会わせたのです。

東条はボースに感銘を受け、すぐに、ボースの目の前で、帝国議会においてインドの独立のために全力で支援をすると約束したのです。

チャンドラ・ボースは1943年の初めに東南アジアに戻り、インド革命軍即ちインド国民軍のリーダーシップを執るようになった時、既に、インド国民会議運動の左派の抜群の指導者としての立場を確立していました。

ボースは、インド独立闘争をはるかに凌駕する遠大な構想を持っていました。彼は独立後のインドに関する明確な計画を有していました。彼は、インド国民を政治的桎梏から解放するのみならず、経済的かつ社会的桎梏からも解放しようとしていました。

1938年、チャンドラ・ボースがハリプーラで行われた議会で議長に全会一致で選出されました。その就任演説で、ボースは社会主義に基づいた経済計画を表明しました。

ヒンドゥスターニ（ヒンドゥー語とウルドゥー語の混合で、一般大衆が使う言葉）をローマ字表記したものをインドの公用語とし、基本的人権、世俗主義、家族計画といった主要な問題を扱ったのです。

彼は初めて計画経済という概念を持ち込み、計画委員会を設置したのですが、これは現在でもインド政府の枢要なる一部です。

計画委員会はボースの生誕百年の 1997 年に本を出版し、これはボースに捧げられ、タイトルは「インド計画委員会の先駆者」と名付けられ、そこでは委員長代理が、ボースの理想は現代のインドでも通用するものであり、その多くは未だ実現されていないと認めています。

このことでも、ボースが独立の戦いの最中にありながらも、未来の先まで見通していたことをよく示しています。

1939 年、ボースは議会でのガンジー一派がインド独立問題で妥協をしようとしていると感じ、議長選挙で再選に挑むことを決めました。

彼はガンジー派のパッタビ・シタラマーヤを破りましたが、この選挙後、ガンジーは「パッタビの敗北は私の敗北である。しかしボース派は国の敵ではない」と声明を發表しました。

しかしネルーに支えられた議会の右派はボースに議長職を退くように要求したのです。ボースは前衛連盟を結成し、インド中の左派を統合した左派連連帯委員会を打ち立てました。

チャンドラ・ボースが 1943 年 10 月 21 日、シンガポールで自由インド仮政府を樹立すると、彼は国民会議の議長職にあった時に提案した様々なアイデアを実行に移しました。

彼はインド国民軍、インド独立連盟においてヒンドゥー教徒、イスラム教徒、シーク教徒の間に完璧な連帯を確立しました。

国民軍では、ヒンドゥー教徒もイスラム教徒もシーク教徒も、イギリスのインド軍とは異なり、キッチンを共有していました。そして驚かれるかもしれませんが、現代のインド軍でもそうなのです。

チャンドラ・ボースはラングーンのヒンズー寺院に赴き、インド国民軍のヒンズー教徒、イスラム教徒、シーク教徒、キリスト教徒とともに、信徒から献金を受けたのでした。

ボースはインドの民を、カーストや信仰とは無関係に連帯させることができたのです。インド国民軍の応募書には今でも、カーストや宗教を書く欄はありません。

特筆すべきことに、彼はまた、70年以上も前にインド独立運動に女性の力も活用し、男性と同等の地位を与えました。

どんな国家も、女性が平等な権利を得なければ真の自由を得ることはないと強く信じていたのです。彼はヒンドゥスターニを亡命政府の公用語とし、「ジャイ・ヒンドゥ」がみんなの挨拶になりました。

大東亜会議の話に戻りまして、チャンドラ・ボースの言葉を幾つかご紹介しますが、それは現代の世界でも通じる言葉であり、私はボース以上にこれをうまく言い表すことはできません。

【以下、 チャンドラ・ボースの言葉】

会議参加の閣下各位の既にご承知のように、元来、インド思想並びに文化は普遍主義を以て、その特色とするものでして、遠き昔にはインドは仏教及びこれを中心とするあらゆる文化を通じて全アジアに光を放ったのであります。

議長閣下、そして私はここに大東亜共栄圏の建設は単に東亜民族のみならず、請われれば全アジア民族と全人類にとって重大関心事たることを指摘したいのです。

私は新自由亜細亜創建の使命が十二分に完遂がなされることを祈る次第です。終りに臨み、私の希望するがごとく、閣下（東条首相）並びに閣下の優れた同僚各位がこの使命を達成できた暁には、

各位はまさに新日本の建設者、新東亜、更に新亜細亜の建設者としてのみならず、実に新世界の創造建設者として、永くその名を歴史に残すことを確信しています。

【以上、 チャンドラ・ボースの言葉】

チャンドラ・ボースの感動的な言葉が発せられて以来、インドと日本はより一層親密な関係を築いて来ました。インドは、日本がチャンドラ・ボースとその仮政府に与えてくれた温かい援助について、大きな借りがあります。

インド独立軍は、日本軍の支援を受けて、聖なる祖国の地に進撃し、インドの北東の端にあるモイランの地に三色のインド国旗を掲げたのです。

しかし、モンスーンの早い到来と連合軍の航空兵力の優勢のために、インド国民軍と日本軍はインパール方面において敗北せざるを得ませんでした。

国民軍の将兵は、イギリス当局により戦争捕虜としてインドに送還され、裁判にかけられました。ところがこれが、インド国民の心に大きな疑問を突きつける事になりました。

インド国民の忠誠心はどちらに向かうべきなのか？外国（英国）の支配者にむけてか？それとも国の独立の為に戦った国民軍の男女の将兵に向けてなのか？

英国支配下のインド陸軍・空軍・海軍は反乱に決起しました。英軍のオーキンレック将軍はインド担当大臣とインド総督に、インド人将校や兵士たちの同情はボースや国民軍へ向かっている。

だからインドの革命運動を抑えるのにインド人兵士たちは頼りにならないと報告しています。スバス・チャンドラ・ボースは確かに戦闘では負けたのですが、インド独立を勝ち取る戦争には勝利したのです。

近年、インドと日本がますます関係を密にして、文化面だけでなく経済協力、科学技術での相互交流も成熟して永続的な、戦略的關係になっていることはとても嬉しいことです。

日本はその存在そのものが、全ての職業と階層のインド人にとって精神的感化力を与えてくれる源であり続けています。インドと日本の首相は二国をより緊密なものにする、二国間関係の新しい協力の枠組を創設を確認しました。

我々は現代、相互に密接に結びついた世界に生きており、日本とインドとの産業連携は両国の世界的発展に貢献することでしょう。

このご挨拶を、1957年、私の父に山本将軍が送った手紙の末尾を読み上げることで、締めくくらせていただきます。(山本敏氏は大島駐独大使の下の陸軍駐在武官で、ボースのドイツから日本への移動に尽力された方です。)

「チャンドラ・ボースはまさにアジアの連帯と世界の平和を目指していたことを知っております。彼の魂が、平和の伝道者として、我々のことを導いてくださいますように」